神話伝説における伏羲氏の位相
――「先天八卦」およびその文化・思想上の意義について

孫　樹林

はじめに

中国の神話は，ギリシア神話や日本神話のような系統性や連続性が欠如し，ただ民間で断続的に伝承され，または古書に断片的にしか記述されていない。そして中国文化に多大な影響を与えてきた儒教では，「子，怪力乱神を語らず」（『論語』述而）とし，非現実的なことを避けるまたは否定的な態度を取った。それゆえに，近代以後に始まった中国神話の研究では一般的に，中国神話の文化的価値および歴史的真実が存在する可能性を一概に否定する態度をとるのである。

このような経緯により，中国神話に際立った「半神半人」（注 1）と「人神一世」（注 2）という文化現象については従来究められず，悉く古人の想像，誤伝，神化などいわゆる低い文明による非現実的な文化現象とされるのである。このような観点はもはや中国神話の常識になっており，蒋観雲，夏曾佑，魯迅，矛盾，顧頡剛，蘇雪林，袁珂など中国を代表する神話研究の開拓者から，現在，神話研究で活躍している張振犁，王増水，閻徳亮，程憬などの研究者に至るまで一貫している。そして神話研究の方法論を中国に伝えた日本でも，この問題においては中国の状況とほぼ同じである。

しかし，神話伝説や古書の記述に即すれば，「三皇五帝」をはじめ，中国文明の進展に貢献したとされる多くの人物の業績に，人間的な行為と思われない超常現象がたくさん存在し，かつ人為による神話の要素が薄く，きわめて自然的な実在として記録され，伝承され続けてきたのである。

その中，「半神半人」「人神一世」に関する記述が多量であるのみならず，それらの諸位相も生き生きとした真実感をもっており，これらは従来の論理に基づけば如何にしても十全に解釈できない。先行研究に腑に落ちないところが多いゆえ，「盤古の天地開闢と道家思想」（注 3）から歴史の実態に即し，古人的宇宙観に立って，「半神半人」「人神一世」現象の究明に取りかかった。「女媧神話における生育問題と道家の生成観」（注 4）を経て，「古書にある黄帝伝説に関する記述から古人の宇宙観を窺う――神話の真実性および神話研究におけるいくつかの問題について――」（注 5）に至って，本研究課題の問題意識が次第に明確になり，古書にある黄帝の記述を蒐集，統計し，黄帝の非人間的な事績（「半神半人」的な諸現象など）を分類，帰納，分析した上，「人皇」「人帝」の一体化等の他，「半神半人」や多時空の問題や古人の神話観等についても概ね考察した。

以上の考察を通じて相当手応えを得ており，同視点をもって「三皇五帝」をはじめ関連の神話の中に存在している「半神半人」「人神一世」現象を続けて追及すべきとした。そこで，本文は伏羲神話における「半神半人」「人神一世」現象の基礎研究として，「三皇」の 1 人である伏羲に関する関連の記述を通して，神話伝説における伏羲の位相を確認した上

で，伏羲の「先天八卦」およびそれの文化・思想的特徴と意義について考究する。

Ⅰ．中国文明の開拓者――「三皇五帝」と伏羲

1.「三皇五帝」について

中国文明の濫觴である神話の視点からすれば，盤古の天地開闢と女媧の人間造りが行われた後，人類の文明が芽生え，「三皇五帝」による文明文化の創造活動によって，人類文明が次第に形成され，漸次繁盛するようになっていった。

史学界では一般的に，『史記』，『竹書紀年』などの史書に記された最初の王朝である夏王朝を中国歴史の源とされ，それ以前の文明に関しては，それらの存在や実態を裏付ける証が不足しているため，たいてい伝説上のもの，神話伝説の時代とされている。

盤古の天地開闢と女媧の人間造りが行われた時期と夏商周の間にある，いわゆる神話伝説の時代に登場していたのが「三皇五帝」である。すなわち，「三皇五帝」は夏が誕生した以前の伝説上の８人の帝王を指している。「三皇」は神であり，「五帝」は聖人としての品格を持っている君主とされている。『周礼』春官・外史に「三皇五帝の書を掌る」とあるように，中国の古書では歴史を述べる際に「三皇五帝」がよく言及されている。

「三皇」に関しては，『尚書』大伝では燧人，伏羲，神農を指し，『風俗通引』，『白虎通義』，『古史考』などの書籍にも同様の説を持っている。そして，後に誕生した道教文化においても前記の三氏を「三皇」とされている。『史記』秦始皇本紀には天皇，地皇，泰皇を「三皇」とされ，『太平御覧』に引く『春秋緯』にも天皇，地皇，人皇を「三皇」としている。しかし，（表１）に示すように，古書には女媧や黄帝も「三皇」とされるなど，「三皇」の定義やその該当者について諸説があり，必ずしも一定しない。

古書における代表的な「三皇」の構成

①	伏羲，燧人，神農	（『尚書』大伝）
②	伏羲，女媧，神農	（『史記』三皇本紀）
③	伏羲，祝融，神農	（『白虎通義』）
④	伏羲，神農，共工	（『通鑑外紀』）
⑤	伏羲，神農，黄帝	（『尚書』序）

（表 1）

現存資料から見れば，「五帝」が出現する前にまず「三皇」が現れ，人類に文明をもたらした文化の英雄あるいは天上の文化を人世に伝えた文明の伝播者として尊ばれている。そして，前漢末から隆盛した神秘主義的な讖緯思想によって，「三皇」は半獣半神の姿をした神として描かれる場合も少なくない。「五帝」に比べ，「三皇」は神秘的色彩を多く有する神明的な存在である。

「五帝」の該当者についても，（表２）に示すように「三皇」と同様にさまざまな説があり，その構成についても相矛盾するものも少なくない。一般的に，黄帝，顓頊，帝嚳，堯，舜の「五

帝」説がもっとも代表的なものである。

古書における代表的な「五帝」の構成

①	黄帝，顓頊，帝嚳，堯，舜	(『大戴礼記』)
②	庖犧，神農，皇帝，堯，舜	(『戦国策』)
③	太昊，炎帝，黄帝，少昊，顓頊	(『呂氏春秋』)
④	黄帝，少昊，顓頊，帝嚳，堯	(『資治通鑑外紀』)
⑤	少昊，顓頊，帝嚳，堯，舜	(『尚書』序)

(表 2)

このほか, 五方の天神を合わせて「五帝」とされる説もある。たとえば, 後漢の王逸注『楚辞』惜誦において,「五帝」を五方の神とされ，すなわち東方の太昊，南方の炎帝，西方の少皡（少昊)，北方の顓頊，中央の黄帝のことを指している。

古書の記述からみれば,「三皇五帝」に関する伝説が代々広く伝承され，戦国時代になって書籍に記載されるようになったことが明らかである。

皇の原義は, 大, 美という意味があり, そもそも名詞ではなく形容詞として使われていた。戦国末になって，上帝の帝が人間の主として呼ばれるようになったため，この皇をもって上帝を称するようにかわった。たとえば,『楚辞』には「西皇」,「東皇」,「上皇」などの呼称がそのたぐいである。このほか,「天皇」,「地皇」,「人皇」（泰皇ともいう）という「三皇」の呼称もある。『史記』秦始皇本紀では，秦始皇帝は「皇」と「帝」号を組み合わせて皇帝としたと伝えられている。唐の司馬貞『史記索隠』において「三皇」を言及し, 彼が補った『史記』三皇本紀では伏羲，女媧，神農を「三皇」としていると同時に，また「天皇」,「地皇」,「人皇」も合わせて記されている。

帝は本来, 天帝を指す。古書から見れば, 孟子の時代には「五帝」という言い方がまだなく,『荀子』議兵篇に堯, 舜, 禹, 湯を「四帝」とした。『管子』,『荘子』にはしばしば「三皇五帝」の呼称が見られるが，具体的な該当者は明示されていない。西周から春秋戦国時代までの伝説や歴史を記述した文献から，多種多様な帝が見られ，後世に種々雑多な帝ができたが, いずれもこの時代の文献からその原型を求めることができる。

司馬遷の『史記』に「三皇」に関する記述が欠如しているとし, 唐の司馬貞は「三皇本紀」を補い，伏羲，女媧，神農など上古時代の帝王に関する内容を補筆した。ただし，それ以降の『史記』にも，司馬貞著の三皇本紀の信憑性が低いとして補筆部分を入れない版本が多い。

司馬貞『史記』三皇本紀に,「天地が初めて成立したとき,「天皇氏」があって，王位についたのは十二人である。みな無欲恬淡でなんら作為するところはなかったが，その徳のために民俗はおのずから化せられた。木徳の王であり，木星が寅の方位にある歳を紀元とした。兄弟十二人で，在位はおのおの一万八千年であった。」とある。

十二人の「天皇」については，十二支の暦を象徴しているとも思われる。そして，五行

の相生配列は木徳→火徳→土徳→金徳→水徳であるが，木徳はその最初にあることから，最初の王の徳とされたものと思われる。

『史記』三皇本紀に記述されている「地皇」は兄弟十一人，火徳の王であった。在位はおのおの一万八千年であった。「人皇」は九人であり，兄弟九人は中国を九州にわけて，おのおのその長となった。およそ百五十世，在位は合わせて四万五千六百年であった。(注 6)

「天皇」,「地皇」,「人皇」の「三皇」はまた，天，地，人という三才に象る説もある。しかし，三才説があってから「三皇」の呼び名に合わせて命名されたというより，後世にできた三才説はこの「三皇」に因んで呼ばれるようになったか，またはそれの同一系統のものであると考えられる。

2. 伝説上の最初の帝王――伏羲

伏羲（伏義，伏儀という表記もある。前 3350 年？～前 3040 年？），古代中国の伝説と神話に登場する神または伝説上の帝王である。伏羲は風姓，別名に宓羲，包犧，庖犧，伏戯などがある。伏羲に関してさまざまな説があるが，「三皇」の一人に挙げられ，中華民族の人文の始祖と崇拝されることにほぼ異論はないようである。

『史記』三皇本紀によれば，伏羲氏は風姓であり，燧人氏に代わって，天位をついで王となった。母を華胥といった。華胥は雷沢(注 7)で神人の足跡を踏んで,伏羲を成紀(甘粛省)で生んだ。伏羲は蛇身人首で，聖徳があった。

伏羲は仰いでは天象を観察し，俯しては地法を観察し，あまねく鳥獣の模様と地の形勢を見きわめ，近くは自身を参考にし，遠くは物事を参考にして，はじめて「八卦」を画し，かくして神明の徳に通じ，万物をその本質に適合しておさめた。

伏羲は，書契をつくって結縄の政治にかえた。はじめて婚姻の制度をたて，一対の皮をたがいに交換するならわしをさだめた。漁猟を民に教えた。かくて，民はみな帰服（伏）したので，宓（伏）犧氏という。また，牛，羊，豕などを家畜として養い，それを庖厨で料理して，犧牲として神祇や祖霊をまつった。それゆえに庖犧ともいう。そして，三十五弦の瑟をつくった。龍の瑞祥があったので，官名に龍という字をつけ，その軍隊を龍師といった。木徳の王であった。春の季節に合う行事をあげて,政令として記した。陳(河南省)に都した。太山(泰山。山東省)に登り,封を行った。王位について百十一年で崩じた。(注 8)

『白虎通義』などにも，伏羲に関する類似の記載がある。前記のほか，伏羲はまた，製鉄や武器の製造などを民に教え，蜘蛛の巣に倣って鳥網や魚網を発明し，猟を民に教えたとある。

要するに，伏羲は，家畜飼育，調理法，漁撈法，狩り，婚姻の制度，楽器，結縄など，人間の生活に必要な基本的な文明文化をつくると共に,「八卦」を書いたことによって中国の文化・思想の原点も確立した。そのため，伏羲は「神明の徳に通じ，万物をその本質に適合しておさめることができた」のである。

このように，中国文明史上で特殊な貢献があったため，伏羲は中国の人文の始祖と崇め敬われ，中原地方では陰暦の三月十八日に生まれたといわれるこの日に，伏羲をまつるな

どの風習が現在までに続いている。

伏羲と女媧との関係について諸説がある。『史記』三皇本紀には，伏羲の位をついたのは女媧とされる。女媧も蛇身人首で，風姓であったという。『山海経』などの古書と民間の伝説によれば，女媧はまた伏羲の妹であり，かつ人類を繁殖するために，兄弟結婚したという。そして，出土した絵画に，蛇身人首で交わっている男女が伏羲と女媧とされるが，確定する証拠は何もない。しかし，陰陽一体という構成，そしてそれぞれの手には文明の象徴または文明を創造する道具あるいはそれの規則と思われる矩（直角定規）と規（コンパス）を持っていることは実に興味深い。

Ⅱ．伏羲の位相——人と神との間

1. 神としての伏羲

『太平御覧』巻七八に引く『詩含神霧』（注 9）に，「大きな足跡が雷沢にあった。華胥がその足跡を踏んで伏羲を生んだ」とある。雷沢は雷の神が住むところ（注 10）であるゆえ，伏羲は当然ながら雷神の子なのである。

この説を裏付ける証拠がある。司馬貞は『史記』三皇本紀に「太皞伏羲氏は風性である」とするが，この風は雷と緊密な関係をもつものであり，雷と同じ系列のものまたはそれの派生したものであると考えられる。そして，伏羲の別名に「庖羲」があるが，「庖羲」または「炮犧」は犠牲を火で臭みを消して熟させること（注 11）も，火を作る雷と関係していると思われる。

『淮南子』天文篇によると，伏羲氏は東方の雷であり，木神の句芒より補佐され，規を持って春を治める。『山海経』海内経にも，伏羲は「建木」という木を通じて，天地の間を往来する（注 12）という。これらの記述から見れば，伏羲の属性は明らかである。つまり，伏羲は決して一般の人間ではなく，神または神の子なのである。

2. 伝説の人類の始祖神

20 世紀の初めに，人類学者が中国の西南地方に住む少数民族の起源に関する調査が行われた結果，伏羲が人類の始祖神であるという結論を得た。その後，袁珂の『中国古代神話』や陳履生『漢代神話主神研究』などもこの観点を保持している。1942 年に中国の長沙子弾庫で出土した楚帛書に対する考証（注 13）により，この観点に新たな証拠を提供した。著名なドイツの哲学者・思想史家エルンスト・カッシーラーは，「中国は典型的な祖先崇拝の国家であり，そこでは祖先崇拝に関するあらゆる基本的な特性とあらゆる特殊の意味を研究することができる」（注 14）と指摘している。伏羲に対する崇拝はむろん典型的な祖先崇拝であると同時に，典型的な始祖神崇拝でもある。実際，このような崇拝は中国の西南地方に住む少数民族に限らず，漢民族が住む広範囲にも広がっており，きわめて普遍的な現象なのである。

3. 太古時代の王

現存するもっとも古い書籍において，伏羲はたいてい上古時代の王として記述されている。その中で，『易経』繫辞伝下でもっとも詳細に記されている。

> 大昔のこと，包羲氏は王として天下を治めたときには，仰いでは，「象」を天に観，伏しては法を地に観，また鳥や獣の様態と土地ごとに異なった草木が生い立っているさまを観て，近くはこれを自分の身にひきくらべて考え，遠くは万物の上について考え，さてそこで，「八卦」を作って，神明の徳がよく行われるようにして，万物のあるべきさまを条理立てた。されば，縄を結んで網を作り，そうして人民に畋をさせたり魚を取ったりさせた。（注 15）

伏羲の中国の文明史における先王としての序列については，諸説がある。その中で，『帝王世紀』の「継天而王，為百王先」のように，伏羲が中国史上初の王という説がもっとも代表的である。『管子』軽重戊篇における先王の順位と時代は，宓戯，神農，黄帝，有虞，夏，商，殷，周であり，『戦国策』趙策第二でもほぼ同様で，宓戯，神農，黄帝，堯，舜，三王（夏，商，周）となる。むろん，伏羲を 2 番目の王にする書籍もあり，『荘子』繕性篇や『屍子』君治篇では，燧人，伏羲，神農，黄帝，唐（堯），虞（舜）という順位になる。

4. 漢代以降の伏羲に関する描出

漢代以降になって，雑家や小説家などによって伏羲をはじめ歴史的人物とされた人々を神格化し，彼らの超常現象すなわち神また天帝としての超能力を描出し，または拡大するようになった（注 16）と見られている。戦国時代以前の書籍に記載されている古事からは，近代以降で言われるような神話の概念や描出が見当たらず，いずれも確たる歴史の人物として登場している。

漢代以降の歴史人物の神格化について，唐の史学者劉知几のように虚構したものとして批判する態度をとる者も少なくない。しかし，神格化したと批判される関係の内容は，太古時代の社会や人間の真実またはそれの一側面を反映している可能性があることも否めない。

Ⅲ．伏羲と「先天八卦」

1.「先天八卦」

一般的に，伏羲が画いたとされる「八卦」を「先天八卦」とされ，文王が画いた「八卦」を「後天八卦」と呼ばれている。「八卦」はまた「河図」と「洛書」とも関係しており，四者の関係については幾つの説があるが，ここでは主に伏羲の「先天八卦」を概観してみる。

「先天八卦」の先天とは普通，陰陽が未だに分けておらず，形質が未だに未成することを言う。これに対し,「後天」は陰陽の二気が相互交わり, 万物ができることを指す。『易経証釋』は，「先天の不変に対し，後天の重きは変にあり。先天の不用に対して，後天の重きは要にある。道に由って言えば，先天は主であり，後天は従である。人事に由って言えば，皆後

天にあり，先天に至ると所為は無し。」と述べている。また，「先天の易は常に静まり，後天の易は常に動く。しかし，静まる中には動くがある。故に先天は必ずや後天を生む。そして，動くにも静まるがある故，後天は先天を離れない。」とする。この解説により，「先天」と「後天」の相違点と相互関係は明らかである。

天地自然に象って卦を作った伏羲「先天八卦」の順序は，「乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤」となり，これを「伏羲八卦次序」ともいう。一方，文王が人々に倫理道徳を示すために「先天八卦」をもとにして作った「文王後天八卦」を「文王八卦次序」とも称され，その順序は「乾・坤・震・巽・坎・離・艮・兌」に変えた上，卦辞を作ったものである。

2.「伏羲八卦」と「河圖」「洛書」

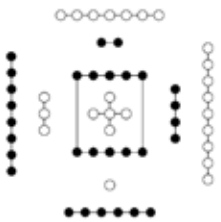
人類文明史的視点から見れば，伏羲の最大な功績は「八卦」を画いたことである。問題は，伏羲は如何にして「八卦」を画いたのか，すなわち彼はいかなる啓発を受けて「八卦」を画いたのか，ということである。この問題に関して様々な説がある中，「河圖」と「洛書」からヒントを得て画いた説がもっとも信憑性が高く代表的である。

『易経』繫辞伝上には「天垂象，見吉凶，聖人象之。河出圖，洛出書，聖人則之。」（天，象を垂れ，吉凶を見す。聖人これに象る。河は圖を出し，洛は書を出す。聖人これに則る。）とある。ここの聖人とは「八卦」を画いた伏羲と見なされている。『論語』子罕にも，孔子の言葉として，「子曰，鳳鳥不至，河不出圖，吾已矣夫。」（鳳鳥，至らず。河は図を出さず。吾，已んぬるかな。）とある。

龍馬が河（注 17）から現れ，神亀が洛水（注 18）から現れ，その背にあった文がいわゆる「河圖」と「洛書」である。

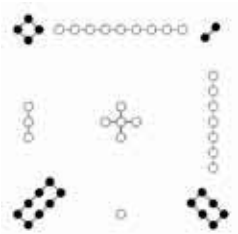
伏羲が観たとする「河圖」と「洛書」の原型は未だに不明であるが，宋代になって「河圖」と「洛書」は図像化され，陰陽を表す黒点・白点の数と方位およびその配置によって表されるようになった。「河圖」はまた「十数圖」とも言い，「洛書」はまた「九数圖」とも言う。そして，伏羲が卦を創案した時の原理を表しているとされる図，または伏羲が龍馬と神亀から観たものに基づいて画いたとされる圖を「先天圖」という。『易経』十翼の中の「説卦伝」では，「洛書」における数と方位，「小成八卦」との対応関係についての解説があるが，その「説卦伝」による方位，「八卦」と数の対応関係を表すものは「後天圖」と呼ばれている。

河圖



（図 1）

洛書



（図 2）

この他,『易経』繫辞伝下ではまた,伏羲が自然万物を観察することによってはじめて「八卦」を画いたと記している。

「八卦」の起源に関する前記の二つのルーツは「繫辞伝」で併記され，異なる側面から創案の二ルーツの特徴を記している。後者の素朴的，現実的，唯物的，人間的な創造という特徴に対し，前者は天地，神明と一体化され，その優れた文明の成果は自ら考案したのではなく，神明から授けられた賜物であると位置づけられている。前者の人間的な英雄のような色彩を有するのに対して，後者は神授したことによって，伏羲および「八卦」の神聖性と権威性が確立されたのである。

同じ「繫辞伝」にある「伏羲八卦」に関する解説は，一見して矛盾のようであるが，実は二者は同一事物に対する解説の内容と側面が異なっているのみであり，必ずしも矛盾ではない。したがって，孔安国，馬融，王粛およびそれ以後の数経学者たちはみな「繫辞伝」と同様の解釈をしている。つまり，伏羲は「河圖」と「洛書」を観た後，ふたたび天地宇宙や人世の万象を観察し,それらを参照しつつ「八卦」を画き出したのである。換言すれば,伏羲の「八卦」は前記の二つのルートを統合したものであり，神授と創造を人世の次元において程よく結合させた結晶なのである。

3.「八卦」の基本形態とその思想的根源

「易」という応用的な学問（哲学思想）の原理，それが存在との関係および「八卦」の実用性について,『易経』繫辞伝上ではこう記されている。「宇宙が成り立つ初めに，天は尊く，地は卑く位置して,「乾・坤」という『易』の根本が定まった。」ここでは「八卦」の成立を天地の創始に基礎づけているのである。また,「『易』には太極が有る。これが「両儀」を生み出す。「両儀」は「四象」を生み出す。「四象」は「八卦」を生み出す。「八卦」によって物事の「吉・凶」が定まる。「吉・凶」が大業を生み出すのである。」と記す。

『易経』繫辞伝上では,「太極」→「両翼」→「四象」→「八卦」という生成関係が記されているが，伏羲が画いた「八卦」は「太極」,「両翼」,「四象」から生まれたからには,前の諸要素と切っても切れない関係があるはずである。それらの関係を概括してみる。

『易』の論理によれば,「太極」ができた後,「両儀」すなわち「陰・陽」という相互対立する要素が自ずと生んだとされる。概略的に言えば,「陽」は正義的，積極的，男性的なプラス要素を代表し,「陰」は邪悪的，消極的，女性的なマイナス要素を代表している。そういった基本的な性質からまた，自然界，人間界，物事の性質，方位，行動など，ありとあらゆる事象に適用することができるのである。

しかし,「陰・陽」だけをもっては，宇宙，自然，人間，事物などの森羅万象を十全に把握することはできない。それで,「両儀」である「陰・陽」はさらに「老陽」,「少陽」,「少陰」,「老陰」の四つに分けられ，より具体的な事象を観察，説明することができるようになる。それは「太極陰陽の図」の中にも反映されている。

『易』は，記号「⚋」をもって「陰」を表し,「⚊」をもって「陽」を表しているが，この対立した２要素をそれぞれ「四象」の「老陽」,「少陽」,「少陰」,「老陰」に加えると，８

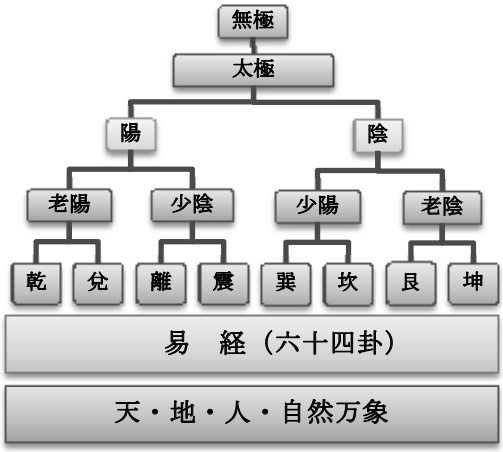
種類の「象」すなわち,☰（乾）☱（兌）☲（離）☳（震）☴（巽）☵（坎）☶（艮）☷（坤）が形成されるが，これがいわゆる「八卦」なのである。

この８つの「象」（概念）があれば，天，地，人の森羅万象を概観することができるのみならず，それらをより詳細的，具体的に解釈し予測することもできるようになるのである。「八卦」は，中国文化・思想の中できわめて重要であり，中国文化・思想を抽象的な形而上学から具体的な形而下学へと具現化させ，かつそれを一段と昇華させた史的な進歩なのである。

このように,「八卦」は上を受けつつ下を起こすような中堅的，実用的なものとなり,（図3）に示すように，それは天人合一や道などの中国文化・思想と完全に一体化し，それらをもっとも代表できる形象化した文化表象（記号）を成し遂げたと言えよう。

前記の『易経』繫辞伝上では「無極」が言及されていないが,道学は「太極」の先にまた「無極」があるとした。もし,「太極」を陰陽もなく，混沌，根元，時間的・空間的な「無」であるとすれば,その「無極」は「太極」を生んだよりマクロ･ミクロ的な「無」の「無」となり，より基本的，根本的，原始的なものであると言わざるをえない。言い換えれば,「無極」こそが万物を創成したより原始的な要素なのである。

「八卦」と中国思想・天地人との関係図



（図3）

Ⅳ．伏羲の中国文化・思想に与えた影響とその意義

『易経』繫辞伝は「十翼」の一つであり，六十四卦三百八十四爻の凡例を通論し，『易』の原理や成立根拠や実践論理を説く経典として，従来『易』の研究と応用できわめて重要視されている。「繫辞伝」はたいてい次のような内容を述べている。

「八卦」の成立を天地の創始に基礎づけ，『易』は天地の道理を尽くし，天地の道に準拠し，天地の道をあまねく条理立てている。聖人は『易』を作って，人事の戒めを示し，卦･象により三才の道を明らかにした。『易』は陰陽の道を尽くし，陰陽や人性などを明らかに

している。『易』の広大な理は道義の基本である。『易』は物事の変化に応じる教訓を示し，聖人は物事の変化を究明する。筮法の数の理，筮法の天地との対応関係を説く。『易』にある奥深い道を讃え,『易』を開物成務の神物であるとする。『易』は言語を超える完全な変通・事利の表現である。卦・爻の道徳的な教訓，『易』は文化発生の元であるとする。卦・爻の構成と意義。子（孔子と思われる）が『易経』の教訓，六十四卦の完備を説く。『易』は徳の終始を示す。『易書』の理解方法を説き，その完備を讃える。乾・坤の徳を説く（注19），等々。

「繫辞伝」の内容で示されているように，『易』は決して単なる占いの学問ではなく，それは中国文化・思想の集大成である。換言すれば，人文の始祖である伏羲は，中国文化・思想の礎を築き上げたと共に，後世に中国文化・思想を理解するための簡易な媒体をも提供してくれたのである。

中国文化・思想はその体系が壮大であり，その内容が複雑多岐である。もし，種々雑多な文化・思想を生み出したその根本を把握，理解できれば，中国文化・思想の神髄を容易に抽象して察知することができるのみならず，その複雑な文化体系を簡単化させることもできる。中国文化・思想の結晶である『易』はまさにそれの1ツールなのである。『易』の神髄を理解できれば，こういった認識上・方法論上の進歩を成し遂げることができるに違いない。

『荘子』胠篋篇第十に，「至徳之世」についての記述がある。「是の時に当たりてや，民は縄を結びてこれを用い，其の食を甘しとし，其の服を美とし，其の俗を楽しみて，其の居に安んぜり。隣国は相い望み，雞狗の音は相い聞こゆるも，民は老死に至るまで相い往来せず。此くの若きの時は，則ち至治のみ。」（注20）この至徳の世は，「人は知があっても使うところは無し」という時代であったという。

伏羲の功績から見れば，彼が治めていた世は荘子の言う「至徳の世」であり，中国の文化・思想を率先して多く創造していた時代であった。伏羲が人類文化史に残した多くの貢献・功績の中で，もっとも偉大な意味を有するのは「伏羲八卦」を創出したことである。

中国文化・思想の基軸は「天神合一」，すなわち無限大の時空に存在する「道」を全次元的な観点から認識し，天・地・人が一体化される中で，「道」に適した行動をとることにあると言ってよい。中国文化・思想史において，宇宙・生命の生成や万物の存在などを形而上学的かつ形而下学的に解釈するために，それらを認識，観測，予測，応用する媒体として「太極」,「河圖」,「洛書」,「八卦」,『易経』,「陰陽五行説」などが相次いで創られてきた。それらは，誕生した歴史時代や文化的背景がそれぞれ異なり，内容の構成や表象もそれぞれ相違しているにもかかわらず，本質論的に言えば，統合された分割できぬ集合体なのである。

もし，『易経』の64卦が天・地・人の森羅万象をもれなく概括，抽象することができるものとすれば，その基本である「八卦」はより洗練，凝縮された宇宙論であると言える。しかし，この「八卦」はそれぞれ「陰・陽」を加えた「四象」からなっているし，「四象」はまた「陰・陽」から構成されている。そして「陰・陽」の「両儀」を生んだのは「太極」であり，「太極」を生み出したのは「無極」なのである。

中国文化･思想は，抽象的･形而上学的な「無極」,「太極」を原点とし,「陰･陽」,「四象」,「八卦」などを経て『易経』に至り，そして思想，学説，倫理，道徳，教養，修錬などありとあらゆる分野に適応するように展開されていったのである。もし，中国文化・思想を形而上学から形而下学へと発展してきたことを川に譬えれば，伏羲が画いた「八卦」はちょうどその中流に位置している。中国文化・文明史において,「八卦」ははじめて具体的で応用可能な哲学的，文化的な方法論と実践法を提出したのである。それがそれ以降の中国文化・思想に与えた影響の大きさおよびその史的な意義については，すでに証明され，今さら言及するまでもない。ただし，伏羲の「八卦」に対して，中国文化・思想の全次元に立って認識しなければ，それを理解不十分になりがちになるし，事と次第によると，誤解や軽視を招き得るのである。今後，中国の伝統文化がますます復興されていくと思われるが，このような問題は看過してはならない課題の一つになるのであろう。

注：

1. 伏羲や女媧などのように，１個体の半分は人間で半分は神であるという現象。この現象は中国神話伝説に限らず，古書にたくさん記述されており，深く考究するに値するものであると考えている。
2. 人と神が同じ世に存在している現象であり,「半神半人」と同じように中国の神話伝説や古書にたくさん記述されている。
3. 孫樹林,『島根大学外国語教育センタージャーナル』第 8 号，2013 年 3 月。
4. 孫樹林,『島根大学外国語教育センタージャーナル』第 9 号，2014 年 3 月。
5. 孫樹林,『島根大学外国語教育センタージャーナル』第 10 号，2015 年 3 月。
6. 野口定男ら訳：『史記』「三皇本紀」。中国古典文学大系 10，平凡社，昭和 50 年 12 月初版第 9 刷。『史記』三皇本紀は，司馬遷が著したものではなく，唐の司馬貞がその補いとして書いたものである。司馬貞にしては,『史記』にこの補完が必須不可欠である。
7. これに関して山東省や山西省などの説があるが, 甘粛省にある説がもっとも有力である。
8. 注 6 に同じ。
9. 著者不詳。前漢代の緯書（吉凶禍福や未来に関する予言の書）の一つ。原書は散逸しており，清代の馬国翰編の『玉函山房輯佚書』に輯本が収録されている。
10. 『山海経』海内東経に,「雷沢には雷の神があり，龍の体に人の頭」などの記述がある。
11. 袁珂：『中国神話伝説』上，92 頁。中国民間文芸出版社，1984 年 9 月。
12. 『山海経』海内経に,「木があり, 青い葉に紫色の茎で, 名は建木という。百仞ほど高く，枝はない。（中略）太皞はそれを通った。」とある。
13. 何新：『宇宙的起源・長沙楚帛書新考』巻一,「楚帛書之訳解与研究」，時事出版社，02 年 1 月。
14. An Essay on Man：『人論』（1944『人間―シンボルを操るもの』），甘陽訳，上海訳文出版社 1985 年 12 月，109 頁。

15. 赤塚忠訳：『書経・易経』繫辞伝下。中国古典文学大系 1，平凡社昭和 50 年 12 月初版第 9 刷。
16. これは結局，文化・思想がある程度異化した後世的な見解にすぎず，実質的には変わっていないと筆者は考えている。
17.「河出圖」の場所について諸説があるが，河南省孟津県の古い城の西北に位置する黄河の岸という説がもっとも信憑性が高く一般的である。
18. 河南省洛陽市洛寧県長水郷の玄滬河と洛河が合流したところであると言われる。
19. 注 15 に同じ。
20. 金谷治訳：『荘子』外篇，第二冊第 56 頁。岩波書店 2003 年 4 月第 36 刷。